

るとともに家庭薬配置販売業の現況に触れてみたい。

(ダイオーステム研究会本部)

顎関節脱臼の疾病史

谷津三雄

古医書のなかに落架風、落花風、落下頰、頰蹉、頰蹉、頰車蹉、脱頰などの病名をみることができ、いづれも急に起こった「あごはずれ」のことで、今日の顎関節脱臼である。

一方、この整復法として有名なヒポクラテス法があり、この名の示すごとく洋の東西を問わず顎関節脱臼は古くからあり、多くの治療法があったと思われる。

神保等菴玄州著『外科衆方規矩』（貞享二年「二六八五」初版、宝暦一〇年「一七六〇」再版）には「落架風」の項に「飲酒ニヨリ或ハ大ニ笑或呵欠（カゲン）シ、下脛（カキヤウ）落テ合架スルコトアタハス」と述べられ、頰車、下関に對する針療法に漢方薬の併用療法を行っているが、これら療法では整復しえなかつた症例もあり、又法として「含両手ニテ按下（モシオロ）シ即拍上（ウチアグ）レハ合フコト神

如シ」と用手的整復法が記載されている。

多紀安元、丹波元惠著、准官刻『広惠濟急法』(寛政二年、〔二七九〇〕刊)には脱頷(あごはずれ)の「病状」に「人口を大に開て笑或は欠をしそこなひて頷がはづれ……口を合すことならざるなり」と大笑とあくびをその原因にあげ、「療法」に「其人に酒を酔ふほどに飲ませて睡たる中に皂莢の末を鼻孔の中へ吹入嚏をさせて自然に復」は、今日でいう鎮静法下における筋弛緩下の整復法とも考えられる。また「患人の体を柱に凭(より)かからせ頭をおしつけて動かぬ様にし身を平にして安坐せしめ、外(ほか)の人正面に向ひ両手の大指を口の内へ入れ槽牙(おくば)の上端を捺(おさ)へ下頰を托住え一先手前の方へ引下却て急に持擧向の向へ一拍子に送上ておし込み開竅の所へ投べし、以後に絹木綿の類にて頰と頤とへまきおくこと半時許なしでよし……かかるときに指をくひ切るほどのことあるなり」と整復法と下顎包帯法および注意とが記されている。

平野元良著、ことぶき草、原病名家須知(ビヤウカココロエグサ)(天保三年〔一八三二〕〜天保六年〔一八三五〕刊)の巻之六には「落架風(アゴノハズレタル)を治する法」として

「欠(アクビ)などにてふと頰車骨(アゴノホネ)の脱たる……」と述べられ、その術は母指を下顎臼歯部に当て下方に圧迫しつつ後方に押すいわゆるヒポクラテス法について図解説明されている。

本間玄調著、『瘍科秘録』の巻四之下では「落架風ハ又頰車蹉、落下顔、脱頷等ノ別名アリ、乃チアゴノハズレルナリ、第一欠(アクビ)、或ハ失笑(ヲホワラヒ)等ニテ脱ルコトアリ、或ハ中風大醉等ニテモ脱ルルコトアリ、是ハ筋ノ緩ミタルナルベシ一度脱ルト癖(クセ)ニナリ数脱(シバシバハツ)ルルモノナリ」と習慣性脱臼についてもふれ、また治法として「先ヅ患者ヲ端坐セシメ医患者ノ前ニ就テ踞(タテヒザ)ニナリ左右ノ拇指ニ綿布(モメン)ヲ巻キ患者ノ口中ニ入レ槽齒(オクバ)ヲ緊シク推シ下ケ中指、食指ニテ頤(オトガイ)ヲ急ニ推シ上ゲル寸ハ年ニ入ルモノナリ、癖(クセ)ニナリテ数脱(ヌケ)ルモノハ補中益氣湯ヲ久服スベシ」とあつて、今日とほとんど同じヒポクラテス法をあげ、さらに整復困難な例では和經湯や麻沸湯などの全身麻酔薬を使用している。

水野沢斎義尚著、朱雀経験、養生辨、後編卷之上(嘉永

四年〔二八五二〕刊〕では、「附、落架風之コト」が記載されており、「頤の外たるを落架風といふ。架は字書に棚なりと有、頤を棚に表し其棚が落しと云意なるべし、風は風邪にあらず、急におこる病をいふ、中風、驚風など皆今まで無病の軀が卒に病を發したるを云、落架風も今まで何事もなかりしかが外ると急に詞も別らず飲食もならず、故に風の字を用ひたるなり」と、その字義について説明している。

また、「治落架風法」には立てた両膝に両肘を立て、くしゃみをした瞬間にその反動でガクンと整復ができると図解で説明しているが、しかもこれが養生書に「附」として記載されていることは、当時この落架風で悩んだ患者の多かったことを物語るものであろう。

なお、落架風を下顎脱臼と訳したのは、栗原順庵著「洋漢病名一覽」〔正編、明治十一年〔一八七八〕三月刊、後編、明治二十二年〔一八七九〕四月刊〕であり、また落合泰蔵著「漢洋病名対照録」〔上下二冊合して一巻、明治十六年〔一八八三〕五月刊〕には「落架風——おとがいのかきかねのはづれるもの又あごはづれる——Luxatio mandibulae——下顎脱臼」

と解説されている。

これら、落架風「あごはずれ」について述べてみたい。

(日本大学)